Osaki

おおさき
～大きい輪、和、話～

復興へ頑張ろう！みやぎ

VOL. 147
平成31年2月28日発行

宮城県大崎農業改良普及センター
〒989-6117 大崎市古川旭四丁目１番地１号
ＴＥＬ （0229）91－0727（地域農業班）
（0229）91－0726（先進技術班）
ＦＡＸ （0229）23－0910
HP http://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/
E-mail osnokai@pref.miyagi.lg.jp

せりの収穫作業と調製作業

中山間地域における新たな動き

平成の時代が終わりを告げ、新たな時代がやって来ます。昨年十二月に国連において「小農と農村で働く人びとの権利に関する国連宣言」が採択され、家族経営などの小規模な農家の十分な生活水準を保つことや協同組合の権利保護などを促すことなどが宣言されました。

この小規模な農家を再評価する動きは、中山間地域の活性化に向けた新たな視点であり、地域に密着している小規模な農家を繋ぎ止め、新たな人を呼び込むために、その地域ならではの仕事を創出することが重要になるでしょう。

この写真は、大崎市岩出山地域で取り組む「せり」の収穫作業の様子です。湧水という中山間地域特有の地域資源を活かし、仙台せり鍋の材料としても需要が高い「せり」の生産に取り組むことを通じて、地域に雇用の場を生み出し、地域の絆を深め、地域の様々な課題に対応していこうとしています。

当普及センターでは、中山間地域の担い手の確保・育成を重要な課題と位置づけ、地域の農業者や関係団体の皆様とともに、地域資源を活かした売れる農産物の生産拡大や集落の機能を支える担い手の育成に積極的に取り組んでいます。

技術次長（総括担当） 松原 馨一

H30年度完了プロジェクト課題の活動報告

優良種子生産に向けた管理体制の向上を目指して

当普及センター管内では県内の水稲種子の約６割が生産されていますが，近年採種ほの周辺でのイネばか苗病の発生が種子生産へ大きく影響を及ぼしています。また，生産者の高齢化や世代交代等によるほ場管理のばらつきや，精選作業時の異品種粒混入により，審査において不合格となる場合がありました。そこで，普及センターでは平成29年度から30年度にプロジェクト課題として，「いわでやま水稲採種組合」のうち，一栗・岩出山地区の種子生産者を対象として，優良種子の生産に向けた管理体制の向上を支援しました。

●イネばか苗病発生対策支援

採種組合とＪＡが水稲作付け前に地区内の種子生産ほ場マップを整備し，イネばか苗病の発生リスクを可視化したことにより，組合員の周辺管理意識が向上し，育苗や田植え時を含めた巡回の強化によるイネばか苗病発生対策が行われました。また周辺生産者に対しても，飼料用米での健全種子の使用等イネばか苗病発生抑制を啓発した結果，イネばか苗病の発生が抑えられ，ほ場審査でのイネばか苗病による不合格はありませんでした。

●ＧＡＰ手法定着支援

講習会等でＧＡＰチェックリストの記入と点検を促すとともに，グループワークを通じたほ場管理の振り返りなどを行いました。その結果，適期のほ場管理が実施され，栽培管理技術の平準化につながりました。また，種子センターの管理技術向上と運営体制改善に向けて，普及センター立ち会いの下での機械の清掃点検や，オペレーター会議での作業管理の振り返りを実施しました。その結果，マニュアルが作成され，来年度から運用することになりました。

普及センターでは今後も，採種組合及びＪＡと連携し，優良種子の生産に向けた取組を支援していきます。

種子センター清掃点検の様子

園芸品目を担う青年農業者の経営安定化と交流促進

担い手が減少する中，新規就農者の地域への定着のためには経営の早期安定化が喫緊の課題です。そのため，普及センターでは平成29，30年度の２ヶ年に渡り，園芸の新規就農者４名を対象に栽培技術と経営管理能力の向上に取り組み，新規就農者が主体性を持って技術･経営の課題解決にあたるように，ＰＤＣＡマネジメントサイクルの手法を用いて支援を行いました。

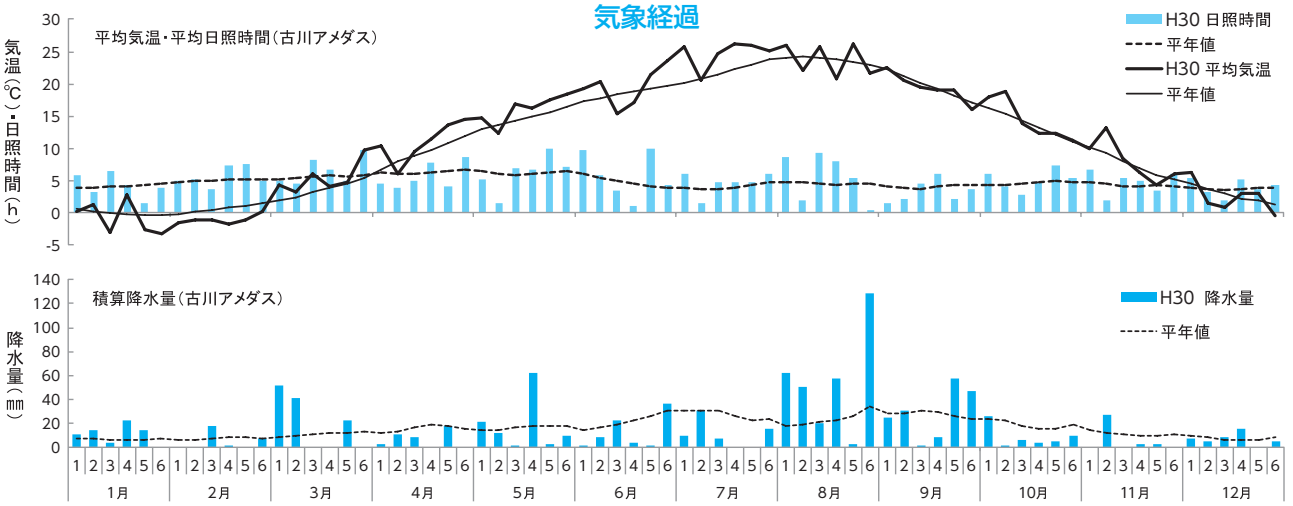
まず，対象者の経営目標を「アクションプラン」という形で具体化し，達成のための具体的な計画立案を支援しました。次に，対象者の計画に沿った栽培管理を支援するために，毎月１回以上の現地巡回による栽培管理指導や情報提供を行い，栽培管理状況の聞取りを通じて改善点の気付きを促し，一緒にその内容を記録しました。そして，作付後に記録した内容を振り返り，次作に向けて改善点を反映した「アクションプラン」を作成するというサイクルを繰り返すことにより技術･経営の向上が図られました。

また，管内の青年農業者を対象に関係機関の協力を得て２年間で全13回の研修会を実施し，栽培技術・経営管理能力向上と併せ，地域内外の農家との交流促進にも取り組みました。栽培技術を学んだ後の意見交換会の開催や視察研修時に昼食を囲むコミュニケーションの場を設定することで，仲間作りが進みました。

新規就農者は大崎耕土の将来を担う貴重な存在です。当普及センターでは今後も新規就農者支援を最重要課題と捉え，関係機関と連携した支援活動を実施していきます。

視察による地域外農業者との交流

平成30年の気象と農産物の作柄



【水稲】

生育期間を通じて高温多照傾向であったことから，生育は順調に推移し，㎡あたり籾数は平年並～やや多くなりました。一方で，減数分裂期以降急激に葉色が低下し，出穂期の高温による白未熟粒の発生や稲体の消耗による充実不足がみられました。宮城県北部の作況指数は101，収量は557kg/10a（東北農政局調査）でしたが，1.9㎜以下のふるい下が増えたほ場もありました。県内の１等米比率は92.1％（11月末現在）と前年より高くなりました。

【麦類】

播種は降雨の影響から平年より遅くなりました。気温が12月から２月頃まで低温で経過したことから生育量は劣り，生育ステージ（幼穂形成期～成熟期）も遅くなりました。また５月中旬の多雨の影響により赤かび病の発生がみられました。平年よりも収量は下回り，粒張りが悪く，未熟粒が多いことから外観品質も劣りました。

【大豆】

播種は概ね適期に行われましたが，播種後の乾燥により出芽が遅れ，また，低温の影響から生育の遅れが見られました。６月下旬からは高温多照であったことから，開花期は平年よりも早まり，生育量も平年を上回りました。成熟期は10月の台風の影響により落葉が進んだことや乾燥傾向であったことから平年より早まりました。収量は着莢数の減少により平年を下回りました。

【野菜】

秋作たまねぎは，肥大期である４月下旬から６月にかけては少雨，高温により生育が遅れ小玉傾向となりました。施設なすは，定植期である３月以降は高温で推移したため初期生育は良好でしたが，７月から８月にかけては記録的な高温の影響で花落ちが多くなり，後半の収量は伸びませんでした。露地加工トマトは，定植期である５月以降は高温と乾燥の影響により，カルシウム欠乏等の生理障害や病害の発生がみられました。ねぎは８月の長雨の影響で管理作業の遅延と病害の発生がみられ，10月は台風によりねぎの折れや倒伏の被害を受け，収量は伸びませんでした。

【果樹】

りんごは３月の気温が高く推移したため，春先の生育は全県的に平年よりも進みましたが，管内においても開花始期は平年よりも６日早い４月28日となりました。その後も好天に恵まれ果実肥大も良好で，ここ10年間で最も多収の年になりました。ハダニ類の発生がやや多かったものの，台風による被害やその他の病害虫の発生は少なく，食味の良いりんごが生産されました。

【花き】

８月出荷について，きく類では６～７月にかけての異常高温により花芽の発達が遅れ開花遅延がみられました。アスターにおいても開花遅延がみられましたが，これは高温が続く近年でてきた障害であり，今後も影響を考慮した栽培が必要になると考えられます。９月出荷について，きく類では高温による生育遅延に加え，８月下旬から９月上旬にかけての日照不足により，花芽の発達が順調に進まず開花遅延がみられました。トルコギキョウでも寡照の影響から開花遅延やブラスチングの発生がみられました。

大崎市の和牛繁殖農家で組織する「若牛会」の経営研修会を開催しました

平成31年２月６日に県大崎合同庁舎において，大崎市の「若牛会」を対象とする経営研修会を開催しました。若牛会は，大崎市岩出山及び鳴子温泉地域の和牛繁殖農家15名で組織され，顧客に評価される子牛生産を目指して子牛市場における産子検査，会員牛舎巡回，県内外の視察や研修を行うなどの活動をしています。

今回は経営力の向上を目指し，「決算書の見方を事例から分かりやすく学ぶ」と題してＨＳコンサルティング株式会社代表取締役本田茂先生の講義を受講しました。先生からは，「３年間の損益計算書を作成し，その推移を比較すること」や「それら数値を活用し，１年後の目標利益や売上げ計画を事前に立てること」などポイントを学びました。

参加者の中にはこれから青色申告に取り組む方もおり，今後の経営に役立てようと熱心に受講していました。普及センターでは，専門家を招いて研修会を開催するなど生産者を支援していきます。

宮城の新たなイチゴ品種「にこにこベリー」が誕生しました！

現在，宮城県の主要なイチゴ品種は「もういっこ」と「とちおとめ」で，「とちおとめ」は年内中に品質の良い果実を収穫できますが，奇形果が多く，収量が少ない等の欠点がありました。そこで，これらの欠点を克服した新品種の育成を目的に，平成17年に宮城県オリジナル品種の「もういっこ」と「とちおとめ」を交配し，「にこにこベリー」が誕生しました。

「にこにこベリー」の特徴として，①きれいな円錐形で果肉も鮮やかな赤色，②糖度・酸度のバランスが良く食味も良い，③11月から６月まで収穫でき収量も多い，④日持ちが良く，輸送性に優れる，といった点が挙げられ，生食からスイーツまで幅広い用途に対応できるイチゴです。

県はとちおとめに代わるオリジナル品種として生産普及，販路拡大を図る方針で，2020年から本格的な栽培が開始される見込みです。管内のイチゴ生産者の方でも「にこにこベリー」を試験的に栽培する方が数名おり，関心が高いことが伺えます。「にこにこベリー」を見かけた際は是非食べてみてください。

表１　「にこにこベリー」と「とちおとめ」の比較（2015 ～ 2016年、名取市）
宮城県農業・園芸総合研究所

作型 定植時期 普通促成	品種名	商品果収量 (kg/a)	とちおとめ比	１果重(g)	果実の揃い
（夜冷なし）	にこにこベリー	542	136	15	やや良
9月中旬	とちおとめ	398	100	15.7	中

四季で見る「大崎耕土」をホームページで紹介しています

平成29年12月に「大崎耕土」が世界農業遺産に認定されました。宮城県北部地方振興事務所農業振興部では，認定を契機とした地域活性化支援の一環として，管内の住民や来訪者に「大崎耕土」や「地域農業」に対する理解を深めていただき，交流人口の拡大に繋げることを目的に，地域で生産される農産物の紹介や農村風景をまとめた『四季で見る「大崎耕土」』を作成しホームページに掲載いたしましたので是非ともご覧ください。

http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/8.html

大崎耕土
世界農業遺産
OSAKI KOUDO
GLOBALLY IMPORTANT AGRICULTURAL HERITAGE SYSTEMS

イノシシの被害防止対策研修会を開催しました

大崎管内では，近年イノシシの目撃情報が増えており，特に山間部では進入防止柵などによる農作物被害防止の取組が進んでいます。

平成31年１月22日に，県大崎合同庁舎で県農産環境課の主催による野生鳥獣被害防止対策研修会を開催し，大崎地方の農業者や猟友会会員を中心に県内から100人以上の方が参加しました。

農作物野生鳥獣被害防止対策アドバイザーの和田三生さんを講師に，わなを用いたイノシシなどの捕獲方法や，捕らえた後のイノシシの押さえ方などを動画を用いて紹介していただきました。また，和田さんは佐賀県で猟具の開発製造業も営んでおり，くくりわなはイノシシの通り道に見えないように設置すること，箱わなは餌を多く蒔き，かつこまめに取り替えることなど，捕獲技術の重要性について熱心に指導していただきました。

当所では，今後も管内市町と協力し農作物を野生鳥獣から守る取組を支援していきます。

岩出山産花きを活かしたハンギングバスケット作りワークショップを開催しました！

平成30年11月21日に（一社）日本ハンギングバスケット協会員を講師に迎え，大崎市池月地区公民館で㈱池月道の駅との共催でワークショップを開催しました。ワークショップは午前・午後の２回行い，午前は，地元産花きを活用した商品加工技術の習得を目指して「あ・ら・伊達な道の駅花卉部会員」を対象に，午後は，岩出山産花きの消費拡大を目指して一般消費者を対象に実施しました。合計32名が参加し，岩出山産のビオラやハボタンを使用して，冬の間も観賞して楽しめるハンギングバスケット製作にチャレンジしました。

参加者のほとんどが初めての経験ということでしたが，和気藹々と熱心に取り組み，全員が素敵な作品を完成させることができました。参加した方々からは「また継続して開催して欲しい！」といった意見をいただき，地場産花きへの関心の高まりや花きを活用したイベント開催に対する期待の大きさが伺えました。

普及センターでは今後も管内産花きの安定生産と消費拡大に向けた支援を行っていきます。

農業経営における家族での役割分担を考える

平成31年１月８日に青年農業者及び農村女性合わせて12名が参加し，「みやぎ農業未来塾」を開催しました。今回は「家族での役割分担」をテーマに蔵王町（県農業士会副会長関口英樹氏），仙台市（青年農業士後藤和人氏）の先進的経営を視察しました。円滑な経営継承や快適な就労環境を実現するためには，気の置けない家族だからこそ役割分担を意識する必要があります。視察先では家族経営協定の作成をきっかけに，それまで話しづらかった休日確保や相続について将来設計ができたとの事例や，他産業に従事する配偶者と家事分担を融通し合うことで，お互いのワークライフバランスを実現した事例が紹介され，参加者は経営と生活の両方の質を高めることの重要性を認識しました。

全国優良経営体表彰

受賞者　株式会社三本木グリーンサービス
代表取締役　渋谷 誠司さん（大崎市三本木）

平成30年度全国優良経営体表彰「生産技術革新部門」において，大崎市三本木地域の「株式会社三本木グリーンサービス」が全国担い手育成総合支援協議会長賞を受賞し，昨年11月に開催された「第21回全国農業担い手サミットinやまがた」で表彰されました。

全国優良経営体表彰（主催：農林水産省及び全国担い手育成総合支援協議会）は，意欲と能力のある農業者の一層の経営発展を図るため，農業経営の改善や先進的な生産技術の活用，６次産業化，独自の市場開拓及び次世代の担い手育成や農地の集積・集約化の推進など，担い手の経営発展を支える取組みにおいて優れた功績をあげた者を表彰しており，当法人は地域農業を支える経営体として，その取組功績が認められ表彰されました。

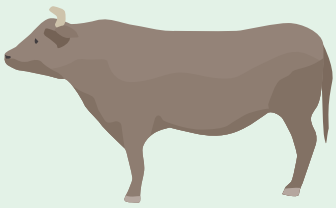
平成30年度農業・農村活性化女性グループ等表彰

受賞者　高橋 順子さん（大崎市古川）

農村において，働きがいがあり，農山漁村の資源をいかした起業活動や，男女共同参画推進に積極的に取り組む等，農業・農村の活性化を実践している個人及び団体を表彰する女性表彰事業において起業活動部門で「高橋順子さん」が最優秀賞を受賞しました。

高橋さんは，米の消費拡大，新規商品による顧客拡大を目指して取り組んだ米粉シフォンケーキの開発，販売や，産直「木曜フレッシュ市」の立ち上げ，企画，運営の中心を担い積極的に消費者との交流活動に取り組みました。また，先輩達と共に古川に常設の直売所「旬の店シンフォニー」を建設しようと奮闘し，設立を成し遂げました。20年間直売所を継続し，現在は会長として運営に尽力しており，これらの活動が評価され，今回の受賞になりました。

新規就農者の紹介



氏　　名：高橋 司さん（平成元年生まれ）
就農地区：色麻町
経営内容

自宅で祖父の代から肉用牛を飼育しており，幼い頃から牛は身近な存在だった高橋さん。高校・大学校と畜産について学んだあと，５年間宮城県畜産試験場に勤務した経験から，肉用牛の飼養技術を身につけたことを活かしたいと考えたそうです。その後も１年間，美里町の指導農業士である菅原邦彦氏のもとで分娩時の対応，調教など和牛繁殖に係る知識・技術の向上に努め，平成28年４月に就農しました。

農業次世代人材投資事業（経営開始型）を活用しながら畜舎等の新築，素牛の導入を図り，現在は繁殖牛16頭を飼養しており，昨年は10頭の子牛を出荷しました。衛生面やスケジュール管理を徹底し，将来的には年間30頭以上の出荷を目標として日々頑張っています。また，監視カメラを設置し分娩時の事故防止に努めるなど，ＩＴ技術も積極的に活用し，効率的な管理を行っています。一方でみやぎ加美和牛改良組合青年部に所属し，積極的に地域活動へも参加するなど，地域振興の担い手としても期待されています。